

享月

日

業斤

月号

探究人

統計数理研究所教授

尾形良彦さん(62)

地震活動の標準モデルとして広く使われるETASモデルを、1980年代に開発した。その実績から、統計学者ではただひとり、地震予知連絡会の委員に名を連ねる。

もともと地震学との接点は全くなかった。73年に統計研へ入り、「実際に役立つ研究を」と勧められて工業関係のデータを探し歩いた。だが、企業秘密の壁が厚くて使わせてもらえなかった。そんな時、地震の観測データなら気象庁などにあふれていた。「何ができるかわからなかったが、他にないから」と地震学会へ出入りし始めた。



地震活動のモデル作りに貢献

当時はまだ地震学者が、予知の実現に自信を抱いていた時代。前兆を把握することに熱心だったが、地震の発生は不確定で見ることができない。どうするか。

突然発生する事象を扱う点過程という統計的な考え方が使えると気づき、そこからETASへたどりつく。「地震に地域性はあるが、標準的な動きはこうだ、というのを示した」。今では余震の発生確率予測などにも使われる。

請われて予知連の臨時委員を8年務めた。「学会より早くデータに出合える」。肩書は気にしなかった。正式な委員に選ばれたのは昨年だ。

「被害をもたらす地震の発生を予測するには、標準モデルからのずれを見つけるのが大切」。ETASを地殻変動の観測網と結びつけた発生確率予測など、今も新たな展開を考えている。(米山正寛)